

<研究ノート>

バングラデシュの経済発展と課題

秋 山 憲 治

目 次

1. 経済・産業の概要
2. 貧困とマイクロ・ファイナンス
3. 輸出産業と外資
4. インフラ整備
5. 最後に：携帯電話の普及

バングラデシュは、アジアの最貧国の1つであるが、2000年以降、経済成長率は年平均5～6%と持続的な成長を示し、近年では6%を超えている。米大手投資会社ゴールドマン・サックスでは、BRICsに次ぎ大きな経済的潜在力を持つ11か国、NEXT 11（ネクスト・イレブン）の1つに位置づけており、今後成長が期待されている。

今回、バングラデシュを視察し、社会は混沌としているが発展のエネルギーを感じた。経験をもとに、今後の経済の発展について印象に残った事項を中心に考察する。

1. 経済・産業の概要

1971年、東パキスタンは西パキスタンから独立してバングラデシュとなった。人口は約1億6000万人で、国民1人当たりのGDPは642ドル（2010年）と低く、1日2ドル以下で生活している国民が人口の約60%を占めるといわれている。しかし、人口構成では20代以下が3分の2を占める若年層で、今後、経済成長の有力な原動力として期待される。国土は、日本の4割ほどの広さで、大部分がパドマ川（ガンジス川）など3つの大きな川の下流のデルタ地帯からなっている。熱帯モンスーン気候で、洪水も発生しやすいが、土地は比較的肥沃で二毛作や地域によっては三毛作も可能な米作が中心の農業国でもある。しかし、人口の多さにより、お米の自給はできず、中国などから輸入しているとのことである。

イスラム教を信仰する国民が90%以上であり、モスクから夜明けに礼拝の呼びかけがなされコーランの一節が流れてくるが、穏健なイスラム国家といえる。人口の70%が農村に住み、60%が農業に従事している。多くの住民が土地持ちでないため所得は低く、農林漁業など第1次産業に従事している。村では地元の製品の露店マーケットが開かれている。その他、小規

模の雑貨店、車や自転車、その他機械の修理業、薪などの燃料販売、家具や衣類などの小規模店舗、また、リキシャやバイクタクシーなど肉体的労働に男性は従事するケースも多い。また、農地の土壌をもとに、煉瓦を焼く煉瓦製造も目についた。特に、現在、都会の建設ラッシュで多くの煉瓦需要があり、乾季の時期、農村の若者の出稼ぎによって製造されていた。住居はヤシの葉っぱで葺いた掘立小屋の趣の家が多く、少し裕福になるとトタン屋根になるようである。

ダッカのような都会は、多くの人間や車、リキシャ、バイクタクシーなどが行き交い、交通渋滞がひどい。整備不良の廃車寸前と思われるバスや車も多く大気汚染など公害も発生しているが、喧噪と熱気を感じる。都会には、雇用を求めて人口が流入しているが、貧困層の流入も目につく。農村の住民が職を求めて、また自然災害、病気などで困窮してダッカなどの都会に流入するが、清掃やリキシャ、また、うまくいけば縫製業のような仕事に従事できる。多くが貧困住宅やスラムに住みつくことになる。

都会では、多くの産業が成り立っているが、衣料・アパレル関係は労働集約的な産業であり、資金調達に目途が立てば、ビルの一室でミシンを購入して製造を始められ重要な輸出産業となる。中国の3分の1ほどの労働コストであり、世界の衣料・アパレル関連企業が製造拠点を求めて進出している。

バングラデシュ経済で、特徴的なものに海外出稼ぎ送金が大きな額を占めている。建設現場だけでなく高技術の医療関係者なども、産油国の中東イスラム諸国を中心に出稼ぎに出ているため、貿易収支は赤字でも海外送金により所得収支が大きく経常収支は黒字となっている。出稼ぎ送金がGDPの11%以上を占めているとも言われるが、これは、国内に人口に見合った十分な雇用がないことを意味している。

一方、バングラデシュは、イスラム教とヒンズー教と宗教の違いによってインドと分離しているが、民族や言語、文化では、インドの西ベンガルと共通の基盤を持っており、インド第3の都市コルカタ(カルカッタ)とも近く、ベンガル地方としての地域的なつながりもある。現在、インドはバングラデシュの第2の輸入国で、綿・同製品や自動車・同部品などが輸入されており、経済成長著しいインドとの経済取引も強まると思われる。将来的にはベンガル地域経済圏のようなことも考えられなくはない。

2. 貧困とマイクロ・ファイナンス

バングラデシュの最大の課題は貧困対策である。貢献したのが、チッタゴン大学教授のムハマド・ユヌス氏で、彼によって創設されたグラミン銀行(グラミンは村落の意)がある。グラミン銀行は、貧困の克服や生活改善を目的とするマイクロ・ファイナンス(小規模金融)で、ソーシャルビジネスを展開している。ソーシャルビジネスは貧困など社会的問題に対しビジネスによって利益を生み出し、問題の改善や解決を図り社会的利益を得ることを目的としている。ちなみに、ユヌス氏はこうした業績により2006年ノーベル平和賞を受賞している。

事業の1つにマイクロ・クレジット（小規模無担保融資）がある。農村地帯の多くの住人は貧困に苦しみ、そのため、仕事などを始める資金が不足しており、金融機関から借りるにしても担保がなく、さもないと、高利貸から資金調達せざるを得なかった。そのため失敗すると夜逃げのような悲劇が待っている。ユヌス氏は貧困な人々に担保なしに小口の融資事業を始めた。村落の信頼できる5人から10人くらいの保証人グループを作り、ビジネスや信頼状況などについて面談・審査を行い融資資格ありと認定されると、担保がなくてもグループの信用をもとに融資を行った。融資は信頼できるビジネスに対し、返済は週単位で、最初は1万円くらいから始まる。確実な返済や取引の成功などで信頼を勝ち得ると融資金額は増えていく。マイクロ・クレジットで成功した村を訪ねたが、成功した家庭を見学することができた。彼らは融資資金で、家庭で使用される料理用オイルを大量に仕入れ、小口販売で利益を確保し商売を拡大・成功させたり、牛を飼育する資金や夫が車の運転免許を取得する資金などに利用していた。金利は10~20%と、日本の感覚でいえば高金利であるが、返済率は98%と、ほぼ100%に近い確率で行われるとのことであった。

マイクロ・クレジットは、かつて日本で行われた「頼母子講」や「無尽」に似た手法であるが、現在では、多くのNGOや金融機関で用いられている。バングラデシュでは最大のNGOのブラック（BRAC）が有名であり、マイクロ・クレジットによる融資事業だけでなく、生活指導、産業育成、技術指導、教育支援、医療活動などソーシャルビジネスも行い貧困克服に貢献している。衣料や装飾物、食器や玩具、絵葉書など小物のお土産品、蜂蜜などの販売を行っている店を訪ねたが、高品質の製品が展示・販売されていた。また、銀行やIT、大学、不動産などの企業運営も手がけ多様な事業展開を行っている。

農村におけるマイクロ・クレジットの融資資格取得者のほとんどが女性である。これまでイスラム社会の中で、家庭に留まり男性に従属するような立場の女性が、小口の融資を受け小規模のビジネスで現金収入を得て、貧困の改善、家事・育児など家庭内での自らの地位や発言権の向上など女性の地位向上に貢献しているとのことであった。

マイクロ・クレジットには、住宅ローンや教育ローン、病気や自然災害など緊急事態に対応したフレキシブル・ローンもあるが、「物乞い自立プログラム」もあるとのことである。貧困の最底辺にいる物乞いに担保・利子なしで少額融資することで簡単な商売を始めさせ、物乞いより商売によって得られる所得が多いことを自覚させ自立を促すというものである。なお、現在、マイクロ・ファイナンスは、発展途上国だけでなく、米国などでも貧困対策の金融システムとなりつつあるとのことである。

3. 輸出産業と外資

現在、バングラデシュの主要な輸出は、人件費の安さにより繊維産業を中心に労働集約的産業である。縫製品は輸出額の8割を占めている。また、農産物用の袋（南京袋）や農業用網などの

ジュート製品、沿海部の農村地帯では海老の養殖、その他皮製品や雑貨なども輸出されている。

バングラデシュは外資進出の有力な候補地である。先進国資本は、中国の政治的リスクや賃金上昇に伴い、中国以外の労働集約産業の製造拠点を設ける「チャイナ・プラス・ワン」を求めており、有名ブランド製品の委託生産が行われている。現在、バングラデシュには、韓国や香港資本も積極的に進出しているが、日本企業も100社くらい進出している。ミシンやジッパーなどを含めた衣料・アパレル関係を中心に、インフラ整備のゼネコンや大手商社、目薬や味の素などもあるが、空きのない輸出加工区、取得に時間がかかる労働許可証・ビザ問題、運輸の未整備、低生産性など問題も多く進出をためらう日本企業も多い。しかし、最近ユニクロが衣料関係の工場を合弁で設立し、また貧困撲滅のソーシャルビジネスにも進出することを発表したことで注目を浴びている。バングラデシュは、経済的潜在力の大きな国であるので、今後、投資促進策やインフラ整備など積極的な外資誘致も予想され、日本企業の進出も活発になると思われる。

さらに、これまで労働集約的な縫製業が輸出産業の多くを占めていたが、産業の高度化や多角化や国内市場の開拓を図り始めている。2021年までに約30か所の経済特区(SEZ)を整備し、外資を誘致し輸出を振興し、中国とインドをつなぐ産業の結節点として発展する成長戦略を明らかにした。これまで、労働集約的な縫製品の輸出を中心に輸出加工区(EPZ)はあったが、外貨の獲得には役立っても、国内市場の拡大にはならないため、経済特区を設けて自動車や家電、ITなど産業の多角化を図るとしている(日本経済新聞、2012年2月22日)。

4. インフラ整備

今回のバングラデシュ視察で、一番印象に残ったのは悪い道路事情と電力不足による停電である。

道路は十分整備されておらず、舗装されていてもデコボコ状態で、バスによる移動は悪路による揺れやほこり、対面一車線道路での運転は、肝試しのチキンレースのようで冷や冷やの連続であった。車は増える一方で交通渋滞が激しくなり、さらに交通ルールの未整備、廃車同然の整備不良の車、数キロメートルの移動に何時間もかかるなど交通・物流インフラ整備は重要課題である。

鉄道インフラの整備も重要である。1日に数本だけの電車の運行、また電車の屋根に無賃乗車する客、線路上で営業する露店など、観光として見るには面白い現地事情であるが、産業インフラとなると危険管理などを含めて多くの問題がある。

バングラデシュは水の国といわれている。ヒマラヤ山脈から流れる大河の下流にあり水には恵まれているが、雨季と乾季では水量に2メートルにも及ぶ差ができて、土地は水没し、しばしば洪水に見舞われる。水が豊富にあっても、水害対策や工業用水・飲料用水として確保・活用する水利や管理が求められる。

電力不足による停電はしばしば起こっている。我々が泊まったホテルでも日常茶飯事であり、

縫製業に用いられる電動ミシンにしても、電力不足で全ての機械を動かすことができず、ビジネス・チャンスを逃す可能性もある。

教育も不十分である。貧困により小学校に通えない子供や途中でドロップアウトせざるをえない子供も多数いる。成人の識字率は56%（UNDP 2011年）であり女性は一層低い。そうした事情を憂慮して、小学校を自分で運営し始めた篤志家も出てきている。我々が訪問した小学校は、サウジ・アラビアに20年にも及ぶ出稼ぎに行った人が、地元で自分のお金で小学校を開設していた。粗末な小屋に、地面がむき出しの床に、机とイス、そして黒板だけの設備ではあったが、子供たちは目を輝かせていた。我々が見学したのは英語と数学の授業であった。

衛生状態については、多くの子供がはだして衣類は垢じみているようであったが、農村では、濁った池での洗濯や外に干された洗濯物をしばしば見かけた。生水を飲むのは我々日本人には厳禁であったが、現地の人が井戸から水を飲んでいる光景も見かけ、衛生状態の悪さはコレラや赤痢など病気の発生が懸念される。また、土壤に含まれるヒ素が飲料水に混入し健康を害する公害問題が深刻になっている。蚊にも悩まされた。泊まった宿は現地では一番いいホテルと言われていたが、蚊取り線香を使用するなど保健衛生面での問題も多い。若い人たちは、彫りの深い容貌でスリムな体型をしていたが、年配の人は、年を段階的に取るというより一挙に老化するような印象で、深いしわを刻んだ顔立ちになる。貧困や気候条件など厳しい生活条件によるのであろうが、平均寿命も60歳代前半のようで短い。

以上のように、バングラデシュの経済発展には、経済・産業インフラだけでなく、学校や病院、社会福祉など生活関連インフラを含めた総合的な社会的資本の充実が求められる。こうした事業は、外国政府や国際機関の資金援助によって賄われる場合が多く、日本政府もODA（政府開発援助）によって広範囲な分野・事業にわたって資金や技術、人的援助などを行ってきた。

5. 最後に：携帯電話の普及

バングラデシュ人について好感を持った。我々がカメラを向けても嫌がらずに写真に応じてくれた。外国人がただ珍しいだけなのかもしれないが、自分たちも、携帯電話のカメラで、積極的に一緒に写真を撮ろうとした。かつてインドを旅した時は、騙されるのではないか、盗まれるのではないかと常に警戒心をもって旅して疲れたが、バングラデシュでは、人々は笑顔で応じてくれ、なにか楽しい雰囲気であった。イスラム教の国家ではあるが、外国人にフレンドリーな対応や国民性は、今後、外国資本を誘致するなどで有利な条件になるのではないかとこの印象を持った。

一方、こうした相互の写真撮影は、バングラデシュ人の友好的な国民性によるだけでなく、カメラ付きの携帯電話の普及も大きい。ちなみに、加入者数からみて、携帯電話の普及率は人口の4割と推定される。バングラデシュのような発展途上国では、従来の電話線による固定電話事業ではなく、携帯電話が爆発的に伸びている。マイクロ・クレジットを利用して、携帯電話を購入

し、それを貸し出すというビジネスが成功した。携帯電話の普及は、ユヌス氏が設立した携帯電話事業会社のグラミフォンの役割も大きい。携帯電話による通信の拡大が、市場の情報収集や情報交換を活発にし、都市と農村の情報ギャップを埋め、市場メカニズムを有効に機能させるのに一役かっており、様々なビジネスの起業や拡大に大きく貢献していると思われる。

最後に、グローバル経済のもとで、今後、バングラデシュは、多くの人口と厚い若年層、そして安い労働コストなど、労働集約的産業が発展する可能性が大きい。インフラを整備し、外資を誘致し、教育を充実し、貧困から抜け出し、中間層を形成していけば、消費や公共投資など大きな内需が期待できる。しかし、教育が不十分で、貧困が解消されず経済格差が拡大していくと、逆に社会が不安定になり、経済発展のマイナス要因になる可能性もある。

参考文献

- 大橋正明・村山真弓編著 (2009) 『バングラデシュを知るための 60 章 (第 2 版)』明石書店
南谷猛・浅井宏・松尾範久 (2011) 『バングラデシュ経済がわかる本：成長著しい「次の新興国マーケット」』徳間書店
Muhammad Yunus (2003), *Halving Poverty By 2015-We Can Actually Make It Happen*, Grameen Bank
Muhammad Yunus (2006), *Social Business Entrepreneurs Are the Solution*, Grameen Bank